

## 1. 自然現象と人間のかかわり

先史人類は、農耕による定住前は、狩猟採取という自然からの食料調達で生活するわけで、獲物などを求めて生活の拠点を移動するものだったと思います。さまざまな自然現象はあったものの、直接的に被害を及ぼすところの自然災害は無かったのではないかと思います。自然災害は自然現象と人間とのかかわりで、この時代は生存するのに失って困るようなものは無かったということになるのではないかと思います。つまり自由度が高い生活スタイルであったので、まともに自然現象の攻撃は受けないと言うか、察知することで避難をしていたのではないかと思います。もちろん、火山の噴石などによって犠牲になることや無知による被害をこうむることはあったかもしれませんが、おそらくさまざまな自然現象は短期間でマスターしていったのではないかと思います。自然現象は、ある意味で単純な繰り返しだったために、学習効果が出やすく情報の共有をすることで、生活の単位が大きくなかったことで障害になることも無かったのかもしれない。

自然の中のはじめ人間は、経験を積み重ねながら、自分なりの暦を作っていたのではないかと思います。しかし、狩猟採集の生活では自然の生態に依存、直結しているので、自然に対しては敏感になっていて、底流には自然への尊敬、あがめる気持ちがすべてであったと思われます。そういう中でも、長い間獲物が得られないとか悪天候が続くということになると、なんとかしたいと言うような願望が強くなって、これまでの一方的な自然に対しての従順な行動から改善してみたい気持ちが、恐る恐るも芽生えて来たかもしれません。自然に対する態度はどう変化していったのか、環境が変化すればさまざまな不適なことが起きてきて、そのために重層的に知恵や工夫が案出するものの、再び新しい不適なことが広範囲に生まれ、この繰り返しがつづきます。

やがて、人類は自然と言うものに対する考え方が、ありがたい賦与されているという感覚から、物欲を満足させるための対象物に考えるようになります。そして、自然をものとしての扱うあるいは扱うことができるとの邪心が見え、それを実現するべく技術や技能へと展開されていったのではなかったのかと考えてしまいます。

やがて、定住したり動植物の生育をコントロールするという生活様式になるとともに自然現象の影響を受けて、災害を経験することになったのだと思います。

日本列島には第一波の渡来人が約 40,000 年前～約 4,000 年前にかけてユーラシアの各地からさまざまな年代に渡って、日本列島の南部、中央部、北部の全体にわたってやってきたといわれています。日本列島は食料や水には苦労しなかったと思われますが、周期的に起きる天変地異には恐れおののいたのではないのでしょうか。そして、その様なあまたの経験は語りつながら、同時に自然と共生する知恵も蓄えていったと思われます。つまり、都合よくつき合うためには、自然の振る舞いを見て、上手に判断することを身につけていったわけですが、やがて、それが付き合いを超えて、支配しようとする意識が生まれてくることにもなっていきます。